

遺伝と食物（新しき世界へ 1968年7月号）

桜沢如一

1. 悲しみと苦しみを知る人々に

悲しみのうちに
食卓に
むかひしことなきひと
暁を
まちわびつつ嘆きのうちに
夜を過せしことなきひと
かかるひとは知らじ
汝！
大いなる力！
自然よ！

ゲーテ

これは「ドリアン・グレイの肖像」や「サロメ」や「獄中記」を書いたオスカー・ワイルドが、晩年獄中からその年老いし母に贈った手紙のうち書きつけられたゲーテの詩のひとふしである。ワイルドは幼い頃、この詩を、人生の悲しみと苦しみを具さに知りつくした母からよく聞かされたのを思ひ出したのである。

これをいくたびか幼い時分から聞かされていなかったら、ワイルドは獄中で悶死し、あの有名な「獄中記」を綴ることも、更生する事も出来なかったであろう。

私も、悲痛な人生を送った。13歳で母を失ってから、今日まで、ありとあらゆる苦しみと悲しみを突き切って来られたのは全くあの若い母の言葉の力であった。私は母を憶ふ。失敗するにつけ、成功するにつけ私は母を思ひ出した。私の一生を支配した母の言葉！その力の偉大さを私はしみじみと憶ひつつ私はこのペンを走らす……。

悲しみと苦しみを知らざる
友の為にその命を捨てざる
戦ひて血を流さざる

幸福と健康を我がものとなし得ざる人々を1人でも2人でも少くしたい、と云ふのがこ

の一篇の念願なのである。

2. 遺伝と文明と女性

遺伝学は遺伝の恐しさを叫び立てる。遺伝学の講義を聞いた某女子大学生は母親と共謀して肉親の兄を殺した。政府は遺伝学の説を聞いて断種法を実施せんとしたこともある。否、30年も前から、哀れな癩病患者は一種の断種を実行され、或は断種に劣らぬ遠島、流刑を実行されて来た。

今や人類は到る処で、あらゆる文明国に於いて、精神病や精神薄弱者、犯罪者が激しく増加するので大きな不安、恐怖に脅かされてみる。アメリカの或州では精神系統の病人が結核患者の8倍に達している（カレル『人間』参照）。これはアメリカ映画を見ても、さもあるべきことだと想像される。アメリカ映画にはずい分常規を逸した人物が現れている。アメリカばかりでなく日本にも同じ傾向がハッキリ認められるので、太き左社会問題が起って来るのである。

国民一般はまだこの問題をさほど注意していないが、それは間違ひである。精神病患者は実に恐るべき速度で激増しつつある。それは一度罹ったら殆ど治る見込みがないのであるから、かかってからあわてた処で何んにもならない。自分の家から1人でも出さないうちに用心しなければいけないのである。精神病患者と云ふのは、西洋風な今の医学では遺伝とされているもので単純な精神病患者から不良少年少女、犯罪者、低能児、テンカン、精神薄弱者などいろいろある。その数は私の考へる処では人口十人につき1人か2人である。

統計によれば所謂

精神病患者	400人に1人
低能	50人に1人
精神変質者	
性格異常者	20人に1人

スナワチ、人口157人につき1人はある事になっている。実際に於いては十人に2人位ひあるだろうと思われる。この精神変質者、性格異常者と云ふのは怒りっぽい人や、涙ッポイ人グチッポイ人、取越苦勞をする人等いろいろある。こう云って来ると、大抵の家庭には1人ぐらいあるのであるから大変な事である。この異常者の度の強いものを

断種して一生、永久に子孫をもつと云ふ人類の本能的大願望を嫌忌云はせず断つと云ふ世にも惨酷?法律が制定され実施されんとしたこともあるのだから、我々は考へざるを得ない。

産児制限を考へる人にとって国家が強制的に断種をやってくれるのなら都合がよいと思はれるかもしれないが、大きな間違いである。断種の結果が如何に恐るべきものであるかについては後に或は別の機会にゆずり(カレル博士の「人間」(この未知なるもの)第三章第九節を参考に見られるならば一層よく分るであろう)。

さてこの恐るべき速度で人類を征服しつつある精神病の外に、まだまだ恐るべき、殆ど不可抗力と思はれている遺伝疾患がある。その主なるものを列記してみると—

内科的遺伝疾患

先天的心臓疾患糖尿病	尿崩症
血友病	喘息、黄疸
進行性筋萎縮症	筋痙攣症等

眼科的遺伝疾患

先天的眼球萎縮(目の小さい人)	
斜視	白内障
眼球震顫症	緑内障
角膜混濁症	黒内障
牛眼	色盲
遠視	近視
乱視	等々
角膜肥大症	

歯科的遺伝疾患

歯齦肥大症	歯列不整
みつくち	等々

整形外科的遺伝疾患

指頭肥大	多指症
上(下)顎突出	その他畸形種々

皮, 腎の遺伝疾患

汎発性白皮病(白子)	しろなまず
汗孔角化症	魚鱗症
禿頭病	掌蹠角化症
腋臭	水泡症

耳鼻科的遺伝疾患

聾啞症

小児科

先天性梅毒

小児結核

精神科遺伝疾患

麻痺性痴呆症

慢性アルコール中毒症

早発性痴呆症(破爪病、緊張病、妄想擬呆)

精神薄弱症(白癡、癡愚、魯鈍)

精神変質症

躁鬱病

ヒステリー

まだこの外にもいろいろな病気がある。犯罪者も遺伝性とされている。こんなに沢山の病気がまるで悪魔の大軍勢の如く人類全体を攻撃しているのである。そして人類は明らかに敗勢である。毎日何千人かが斃されてゆくのである。古い時代には梅毒の如き病身だけで滅亡した民族もあると云ふが、今日は以上の如く遺伝的即ち現代西洋医学では治療不可能なる疾患が沢山あり、その上にまだ無数の疾患があり、更に新しい病気が増加してゆくのであるから人類の運命はまことに危い。文明は正に危機一髪の状態風前の燈である。

処が「遺伝性の病気」と云ふのは実は「現代医学で治せない病気」と云ふ程の意味である。それらは全てが決して遺伝であると証明されている訳ではない。誰も責任をもって、右の如き沢山の病気の一つをさへ確かに遺伝であると断言している訳ではない。「まづ遺伝だろう」程度のものである。遺伝であれば医者責任ではないからである。云はば医者の無能のカムフラージュである。ずい分無責任極る話である。誰もこれらの病気の遺伝のメカニズムを見届けた学者はいないのである。只、進化論と云ふ独特の偏した考への牙城が崩壊したので、たまたま古い反古の中から拾ひ出されたメンデルの植物の遺伝的傾向に関する克明な、然しこれもずい分狭い偏した物の見方を取り上げて、それで進化論の破れをつづろって行かうと云ふので遺伝学と看板を塗り変へたものにすぎたいのである。実際メンデルの主張した植物の遺伝学と、現在行はれている「人間の遺伝学」とは本質的に殆ど何の関係もないものである。これは最も非科学的な医学者が、巧に、又不知不識の間に植物の遺伝的傾向に関する研究を人間の病気に関する医学的研究にすりかへた手品なのである。これもいづれ後にも少し詳しくお話ししたいと思ふが、それよりも重大な問題はこの人類の運命を危機に臨ませ、現代文明の崩壊を招

きつつある所謂遺伝的疾患はすべて、例外なく女性の責任にかかるものであると云ふ私の主張である。

私は声を大きくして叫ぶ

人類と文明を亡ぼす遺伝的疾患と云われるものは全て女性の無知が招く災害の最も大なるものである？

実に無知なる女性こそは人類に滅亡を来らしめ、自らをも自分の一家をも、国家をも不幸のドソ底に突き落す責任者である？

以下、私は賢明なる女性、人類に幸福と健康をもたらす事を最大の念願とする女性、最も深く悲しみと苦しみを知る強き女性に、右の如き私の断言を説明し、遺伝学の誤謬を摘出し、且つ人類最大の不幸とも云ふべきこの遺伝的疾患を地上から一掃する方法をお話して、その協力を願いたいのである、人類の幸福のために—

3. 天才や狂人や、善人や悪人を生むのは男性か、女性か、遺伝か環境か？

イ) 魚鱗症の女

ここに遺伝学者がよく引用する一女性の系図がある。

此の女性は第一回の結婚に於いて男子三人、女子二人の子供を生んだ。その五人には一人も魚鱗症がなかった。処が第二回の結婚に於いてこの女性は女子三人を生み、三人共魚鱗症で、死産または生後間もなく死亡した。

この女性について遺伝学は次の如く語る—「彼女は魚鱗症の遺伝をもっていた。この遺伝は劣性であって潜伏していたのである。処が第一の夫は同じ遺伝をもっていなかったが、第二の夫は同じ遺伝をもっていた。そこでその三人の女の子供は皆魚鱗症であったのである」

然るにこれは推測、臆測であって、全く非科学極る断定である。何故なれば魚鱗症が生殖細胞の何の部分にあるのかも分っていないし(そんなものが分る日は永久に出来ない!) 何故それが現れたり隠れたりするのか、そのメカニズムも分っていないからである。ハッキリ原因とメカニズムが分らない事を信じたり主張したりするのは迷信と云ふものである。遺伝学や医学がこの女性の潜伏性遺伝をただ診断によって発見することが出来るのなら、そしてその後、実際子供達に遺伝が現れて、その証明するのなら或は我々も首肯しようが、そんな事は彼等には出来ないのである。又第一の夫と彼女との間の子供は男の子の方が多いのに、第二の夫の場合には女ばかり出来た理由も、これを引用す

る医学には分っていない様である。魚鱗症の子が出来て始めて親を潜伏遺伝だと云ふのはオカシナものである。そんな事なら誰にだって出来る、大きな間違いである。いくら医学や遺伝学がまだ科学的に正確でないにしても正確な実験と観察によって将来の出来事を予言するものでなくてはならない筈である。

私の観察から云ふとこれは全くこの女性の潜伏遺伝の罪でもなければ、第二の夫の故でもない。これは正しく彼らの環境と食物の故なのである。第一、女の子ばかり出来る家庭の食物は男の子ばかり出来る家庭の食物とは全く違っているのである。私はその秘密を知っている。だから私は男の子が出来る食箋や、女の子ばかり出来る献立をかく事も出来る。又魚鱗症の子ばかりを全く遺伝のない人に生ませる様な献立もかける。女の子ばかり出来る原因と魚鱗症が出来る原因は同じものなのであるから。そして私はこの女性の生活や環境を想像する事も出来る。即ち彼女は第一の夫と結婚した時は余り裕福な生活をしていない。第二の夫との生活は可なり余裕のあるもので、毎日動物性蛋白質を恐らく少くとも十匁以上砂糖を三匁以上取っていたものであろうと推定する。

以上の如き推定の理由と根拠をここで詳しく説く事は到底私の時間が許さない。それは私の他の著書に譲ろう。ただ読者諸君に、上流家庭や海岸地方や歐洲大都會の如き動物性蛋白質の摂り方の多い地方に女子の多い家庭がよく見受けられる事実を憶ひ出して頂きたい。女護ヶ島の伝説はあっても、男誰ヶ島がないこと、古今東西何れも同様であること……。

魚鱗症は、その他あらゆる乳幼児の悲劇と即ち家、国家、人類のあらゆる不幸と共に、ある一定の環境に於ける女性のある食物によって生れてくるのである。

(ロ)ダーウィンの家系

ダーウィン家の家系を調べてみやう。これによると進化論の父と云われるチャールズ。ダーウィンは祖父として有名なエラスムス・ダーウィンをもっていた。このエラスムスなる祖父が偉大な学者であったので、チャールズの如き偉大な学者が生れたのだと、遺伝学は云ふ。然しよくこの家系を注意して見ると面白い事がある。エラスムスは二度結婚してみるが、第一の妻と彼との間に出来た子供は六人(男三人、女三人)とも有名な人にはなっていない。六人とも凡人であった。然るに第二の夫人と彼との間に出来フヒ子供は三人とも男であって、その中二人も有名な学者として知られている。これは正しく第二の夫人が優れた人であった事を雄弁に物語る事実ではないか。これを遺伝学者は染色体の神秘でゴマカスのであるが、それは余りに子供じみたトリックである。染色体の

メカニズムを誰が証明出来よう!それに三人とも男であったと云ふ処に私は深い意味を見るのである。即ち

生活形式が頗る緊張したものであったのだ。(イ)の魚鱗症の場合の反対であったのだ。

この第二夫人を祖母として生れたチャールズ・ダーウィンは有名な学者の子で自分の従妹にあたる婦人を妻とした。このチャールズ・ダーウィン夫人が有名な良妻賢母であった事は世間によく知られてみる処である。

チャールズ・ダーウィンは四十年余り病苦に親しみつつあの進化論を仕上げたのであるが、こんな仕事は余程良き内助者がなくては出来ない事で、彼女は確かに理想的な研究の助手でもあり、家政の長でもあったに違ひない。彼等の間に七人の子が出来その中五人までが男子であり、殊に第一子、第二子、第三子とそろって男であり、以下も女、男、女、男と出来ている処などを見ると、如何に彼等の生活が真剣と緊張につつまれた質素な生活であったかも偲ばれて床しい。その長い間の努力は五人の男子中から四人の有名る人物が出た事によって報ひられている。

これによって観ても分る如く偉大なる人物は必ず立派な女性によって育てられているのである。偉大な人物の出現には父よりも母の方が重大な役目を持っている。私は過去四半世紀以上にわたって、食物で病気を治す方法を何十万という人々に指導して来た結果、今日では何人を見てもその人の母の生活態度や境遇、思想をその人の顔や、手の上に読み取る事が出来る様になった。(何故なら、人の顔や手や足は全てその母の胎内で造られたものであり、大抵十四五際までは母の嗜好、食物、思想に親しんでいるからそれが烙印の如くありありと顔や体に現はれるのである)良き母をもった人には実に幸福な賢明なそしてすぐ健康を奪回する人が多い。

(ハ) ゲーテの系図

遺伝学者はよくゲーテの系図をも引用して、遺伝の力の偉大さを示さうとするが、これも全く遺伝の力の弱さの証明になり、母性、女性の人生に対する真剣な態度のあり、無しが如何に子供の(従って母性女性自らの)運命を左右し、吉凶禍福を招致するものであるかの証明になるのである

クレッチェメールによれば、ゲーテの父は平凡な小官吏であつて、母は才気煥発の女性であつた。ゲーテには五六人の同胞があつたが、詳細は分らない。彼には五人の子供が出来たが何れも夭死し、只一人アウグスト・ゲーテだけが残つたが、病身で、酒呑みで、半精神病者で、四十一歳で死んだ。ゲーテには孫が二人あつたが、二人とも若くし

て死んで、ゲーテの家系は三代目にして全く絶えたのである。

人類の光榮とも云はれる大ゲーテは文学に於ける如く、哲学に於ても、自然科学に於ても不朽の業績を残しているが、子孫は僅か三代一半世紀を出でずして滅亡したのである。もし遺伝と云ふ事が事実であるとすれば、ゲーテ程の大人物の後裔がかくもはかなき運命に追はれる事はない筈ではないか。一体何がゲーテ家を亡ぼしたか？西洋では誰もこれに答へるものがない。遺伝学者もふれない様である。

私から見ればこれは極く簡単である。それはゲーテが不運であった。彼の妻が悪かったのだ。彼が六、七回も結婚したと云う事は、それがすべて失敗だったことを証明する。いい妻がなかったのである。

賢明なる女性がなければ、如何に偉大な人物の家庭にも人生を明るく幸福にする様な偉大なる人物は生れないし、又その後継者も出来ないのである。

遺伝学者はゲーテの母なる女性を優れた女性としていないが、伝記作者はゲーテ自身の云ふ処によるとゲーテの才能は母親か享けついただと云ふ事である。

優秀なる天才や人物は特筆大書され、遺伝式系図の上に於いて特別な形式で表現されているけれど彼らを生み、彼らを育てた女性は大抵単なる母だけで現されている。これが遺伝学者の顕微鏡的近視の故なのである。偉大なる人物や優れた天才の伝記は全て彼らの母たる女性の優越を筆をつくし、口をそろへて力説している。この一文の冒頭に引用したワイルドに於いてもその獄中記を読むと幼時の母の影響が彼をして彼たらしめたことは明らかである。

女性の力が如何に偉大なるものであるか、と云ふことを証明する為に吾々につきつける全ての遺伝式系図である。

それらはすべて染色体でなくて、母性の生活態度の優越と重大さを語っている。

(二) 善人も悪人も、男も女も

以上不十分ながら私は偉人や、病弱者を生むのは遺伝ではなくて、その母胎たる女性の生活態度、人生観、思想である事を説いた。それも遺伝学者が武器とする遺伝系図によって反証したのである。

善人や悪人や、低能や劣等児を生むのも亦女性である。それを有利なカルリカーク家やジュ・ークの家系を引用して説きたいのであるが、極度に多忙な私には今それが許されない。只私は毎日の様に指導している沢山の病弱者の中にその実例をいやと云ふ程みている事を告白しておく。食物を正しくすることによって、食生活を転回せしめること

によって、病弱者を健康者に劣等児低能児を優秀児に、悪人を善人にさへする事が出来、それがすべて女性の権利の範囲にあること云ひ換へれば、社会改造は先づ人間改造即ち人間革命に始められねばならないが、その人間を造る材料と化学者生命の薬局長は台所にある食物と主婦、妻、母—女性である事を私は断言するのである。

4. 人類向上最高文化建設の鍵を握るものは女性なり

大体世間で有名になる才能は男性的、社会的才能であるから当然男性の方が遺伝学者式の系図には現はされるのであるが、女性の優越は家庭的、母性的であって、社会的なものではないのだ。男性の本来の才能や成功は社会的事業であって、家庭的ではない。従って世にひろく知られるのが当然なのである。然し女性の本来の才能による最大の成功はそんな優秀な男性を作り出す事、即ち本質的に家庭的、非社会的事業なのである。女性の成功は大きければ大きい程家庭の奥深くかくれて了ふのが当然である。これは劇における俳優と舞台監督の關係に似ている。劇の成功はその主演俳優の社会的名声を大きくする。然しその主演俳優をして、かく大きな成功を収めしむるものはその舞台監督の隠れた力なのである。舞台監督の成功は劇の成功が大なれば大なる程かくれるのである。舞台監督の姿が舞台に現れる様では、その劇は失敗なのである。音楽と作曲者の關係もこれに似ている。

此の意、味から偉大なる人物を生んだ母は多く偉大な人物であったので、遺伝式系図の上に於いてその偉大なる人物と同じ特別形式で現されねばならない。

さて、以上の如き系図から我々は何を読みとる事が出来たか?それは(イ)の場合と同様の法則—環境と食物—が(ロ)の場合にも(ハ)の場合にも働いていることと、それが(ロ)では(イ)の場合の反対の方向表現を取っていることである。

云ひかへると、これらの系図に於いては環境家庭、食物の偉大な不可抗力が働いてみるのであるが、(イ)の場合は悪い環境、家庭食物であっただけであり、(ロ)の場合は良い環境、家庭、食物であっただけである。

読者諸君銘記せられよ、人間を育てる「環境と家庭と、食物」は全て女性の支配範囲にあることを!幼きものの環境も食物も実は女性の明知と不明の表現であることを!

正しい家系に於いては常に自然に一男一女又は一女一男の順序で出来る。これはその生活殊に食生活!が非常に伝統的な、規則正しきものであったことを示す。それは(イ)の場合の反対なのである。殊に第一子が男で第二子が女であると云ふことは重大な意味

をもっているのだ。その食生活のインディケーターとして。

さて、かくの如く、重大なる環境と食物に関する女性の明知とはそもそも何を意味するか。

私はここで、私の一生を奇妙な縁から病弱者の健康指導に当らせた「正しい食物」の原理を語らねばならないのであるが、それは余りにここで語るには多すぎるから、詳しくは拙著にゆづって、私に病弱者を指導せしめた原理のシルエットを書きつらねて、諸君の沈思黙考を煩はしたいと思ふ。

食物なき処生命現象なし。

故に一切の生命現象は、その個人的たると、社会的たると、心理的たると生理的たるとを問はず、一切、食物即ち生命の根原体の影響の下にある。肉体の病気も、精神の傾向も、性格も思想も全ては食物の影響の下にある。

食正しければ人も亦正し！
食とは生命を生み、育てる一切である。
食は神である！
その食物は女性の手に一任されている。
女性は生命の薬局長である。

※

以上の二篇は旧稿ではあるがここに併載して識者の参考に供する。実に人間革命とは、食物によって実現される。食物をかへることによって一切の病気がなほり、人間自体が革新されるのである。この近き道をしらずに哲学や宗教や教育を云々することは全くムダだ、凡ては食物である。凡ゆる事柄の根本に横るこの食物が理解できずして社会改革や永遠の平和を達成することはできない。日本の民主革命も人間革命の根本問題である生命のモトたる食物の重大性が理解されない限り、その目的に達することはできないのである。

(桜沢如一先生著 人間革命より)

(1948. 1. 18 発行)